

# 私の出会った人たち

## (2)

関谷啓子

同じ女性が何回も駆け込んでくる事がある。

同居人の暴力を受けた女性が駆け込む施設だからその度に理由は聞かずにまず受け入れる。

同じ職員が担当する場合もあるしそうでない時もある。

スタッフは常時2～3人のケースを担当するが、全くの順番なので、極端に言うと3回入所して3回とも担当が違うこともある。

担当者によってそれぞれの向き合い方が異なるし、何より本人の違った面が垣間見えて興味深い。

Tさんはちょうどそのケースで、彼女にとって私は3人目の担当者だった。

毎回同じ同居者からの暴力である。

DV被害の女性の場合、身体の痣が黒から紫そして黄色っぽく変化していくにつれて、気持ち微妙に変わってくる人が少なくなかった。痛みが薄らぐのと並行して相手への恐怖や嫌悪感が薄くなっていくのだった。

「もう一回ちゃんと向き合ってはなしてみます。彼がどんな暮らしをしているのか心配なんです」と言って同じ場所に帰って行く。

わたし達は、もう二度とここへ来ないように頑張りなさい、、と言って送り出した。

3回目の入所に際して私は 何故同じ事が起こるのに彼の元に戻るのか、、と単刀直入に尋ねた。

暫く考えた後、逆に「独りで暮らした事がありますか」と尋ねられた。無いと返事すると

「それでは到底私の気持ちは解ってもらえない」と言う。

独りで鍋をつついたことのない人にあの寂しさや不安感は解ってもらえない、、と言う。

20年も昔の話である。今はコマーシャルでも「一人鍋用のお出し」

が氾濫しているが、あの時の返事は私にはショックだった。  
そんな事に気づきもしないで、もう大丈夫ですよと言う彼女たちをそのまま見送った自分の甘さを嫌というほど思い知らされた。

暫く施設に居て、アパートも職場も決まって彼女を送り出す朝が来た。  
仕事頑張って！もし我慢できずに彼の所へ戻っても構わないからね。  
同じ事が起こったら又ここへ戻って来なさい。待ってるっていうと変だけど、でもここはあなたが帰れる場所だからね と言って送り出した。聞いていたほかのスタッフに呆れられたが、それが私の正直な気持ちだった。  
人は帰れる場所があると思うだけで、そこに踏みとどまる事が出来る。  
その後、機会があると彼女の職場をそっと覗いた。パン屋さんだったので、店の前を行ったり来たりして元気な姿に安心した。  
随分後にその話を職場で白状したら、歴代の彼女の担当も同じ事をしていたのが分かってみんなで大笑いした。  
働く仲間がこんなだったから、相談所で8年間、働くことができた。  
30数年間働いた中で、一番厳しくでも一番多くを学んだ有り難い職場だった。